

QE スクエア



本欄は「会員の声」と同様、個人意見の主張の場であり、営利目的や誹謗等を除き、会員が自由に主張や意見を述べるためのスペースである。

●直交多項式展開の作法

(株)小松製作所 細井光夫

1. はじめに

多項式近似において、正規化されていない直交多項式で展開した「係数 β 」をそのまま評価するのは比較障害があつて不適切である。また、原点を通らない多項式で展開すべきである。

直交多項式展開の作法について考えたことを以下に示すので、ご意見をいただければ幸いです。

2. 正規直交多項式

最小二乗法で表1に示す入出力の n 個のデータセットを $(n-1)$ 次以下の多項式で近似する。

入力 M の関数である正規直交多項式を下記する。

$$\begin{aligned} &\alpha_{00} \\ &\alpha_{11}(M - \alpha_{10}) \\ &\alpha_{22}(M^2 - \alpha_{21}M - \alpha_{20}) \\ &\alpha_{33}(M^3 - \alpha_{32}M^2 - \alpha_{31}M - \alpha_{30}) \end{aligned}$$

表記を簡単にするため、有効除数 r を拡張した以下の式を使うことにする。

$$\begin{aligned} r_0 &= \sum_{i=1}^n M_i^0 = \sum_{i=1}^n 1 = n \\ r_1 &= \sum_{i=1}^n M_i^1 = \sum_{i=1}^n M_i \\ r_2 &= \sum_{i=1}^n M_i^2 = r \\ r_p &= \sum_{i=1}^n M_i^p \end{aligned}$$

0次の正規直交多項式の正規性から、

$$\begin{aligned} \sum_{i=1}^n \alpha_{00}^2 &= 1 \\ \therefore \frac{1}{\alpha_{00}^2} &= \sum_{i=1}^n 1 \end{aligned}$$

表1 直交多項式展開の対象

入力	M_1	M_2	...	M_n
出力	y_1	y_2	...	y_n

0次と1次の正規直交多項式の直交性から、

$$\begin{aligned} \sum_{i=1}^n \alpha_{00} \alpha_{11} (M_i - \alpha_{10}) &= 0 \\ \sum_{i=1}^n (M_i - \alpha_{10}) &= 0 \\ r_0 \alpha_{10} &= r_1 \\ \therefore \alpha_{10} &= r_0^{-1} r_1 \end{aligned}$$

1次の正規直交多項式の正規性から、

$$\begin{aligned} \sum_{i=1}^n \{\alpha_{11} (M_i - \alpha_{10})\}^2 &= 1 \\ \therefore \frac{1}{\alpha_{11}^2} &= \sum_{i=1}^n (M_i - \alpha_{10})^2 \end{aligned}$$

0次と2次の正規直交多項式の直交性から、

$$\begin{aligned} \sum_{i=1}^n \alpha_{00} \alpha_{22} (M_i^2 - \alpha_{21}M_i - \alpha_{20}) &= 0 \\ \sum_{i=1}^n (M_i^2 - \alpha_{21}M_i - \alpha_{20}) &= 0 \\ r_1 \alpha_{21} + r_0 \alpha_{20} &= r_2 \end{aligned}$$

1次と2次の正規直交多項式の直交性から、

$$\begin{aligned} \sum_{i=1}^n \alpha_{11} (M_i - \alpha_{10}) \alpha_{22} (M_i^2 - \alpha_{21}M_i - \alpha_{20}) &= 0 \\ \sum_{i=1}^n M_i (M_i^2 - \alpha_{21}M_i - \alpha_{20}) &= 0 \\ r_2 \alpha_{21} + r_1 \alpha_{20} &= r_3 \end{aligned}$$

連立方程式を行列式にまとめると、

$$\begin{aligned} \begin{pmatrix} r_1 & r_0 \\ r_2 & r_1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \alpha_{21} \\ \alpha_{20} \end{pmatrix} &= \begin{pmatrix} r_2 \\ r_3 \end{pmatrix} \\ \therefore \begin{pmatrix} \alpha_{21} \\ \alpha_{20} \end{pmatrix} &= \begin{pmatrix} r_1 & r_0 \\ r_2 & r_1 \end{pmatrix}^{-1} \begin{pmatrix} r_2 \\ r_3 \end{pmatrix} \end{aligned}$$

2次の正規直交多項式の正規性から、

$$\begin{aligned} \sum_{i=1}^n \{\alpha_{22} (M_i^2 - \alpha_{21}M_i - \alpha_{20})\}^2 &= 1 \\ \therefore \frac{1}{\alpha_{22}^2} &= \sum_{i=1}^n (M_i^2 - \alpha_{21}M_i - \alpha_{20})^2 \end{aligned}$$

このように正規直交多項式の「係数 α 」は、直交性と正規性の制約から入力 (M_1, M_2, \dots, M_n) の値だけで計算することができる。

3次の正規直交多項式の直交性から、